

アルケイアー記録・情報・歴史
第一四号 二〇一九年十一月 一―三四頁
南山アーカイブズ

「レイモンド・リノベーション・プロジェクト」
の理念と実践

武田新平

株式会社日本設計

“Raymond Renovation Project”

NIHON SEKKEI, INC.

TAKEDA Shimpei

Archeia: Documents, Information and History
No.14 November, 2019 pp.1-34
Nanzan Archives

- 一 はじめに
 - 二 南山大学名古屋キャンパスの建築的な特徴
 - 三 南山大学名古屋キャンパスの成り立ち
 - 第一フェーズ
 - 第二フェーズ
 - 四 第Ⅱ期工事
 - Q棟
 - リアン
 - 五 第Ⅲ・Ⅳ期工事
 - G 30
 - G棟
 - F棟・H棟
- メインストリート・コリドー

「レーモンド・リノベーション・プロジェクト」の理念と実践

武田新平

一 はじめに

日本設計の武田新平と申します。本日はご出席ありがとうございます。また自分が設計した教室でプレゼンテーションできる、とても貴重な機会をいただきありがとうございます。

私ども日本設計は、関西学院大学キャンパス整備や建築設計など、大学の設計に長年関わらせていただいております。今回の南山大学様のプロジェクトは立教大学の改修工事等を担当したチームと、大林組の名古屋支店のチームで関わらせていただいております。私自身の関わりは、南山大学の歴史の中ではOne Campus Many Skillsの下、二〇一四年から始まる第二期の新築工事の設計から始まり、現在第Ⅲ・Ⅳ期の改修工事の基本設計、発注者支援を担当させていただいています。

私たち設計者は大学施設の設計を進めるにあたり、大学の理念やマスタープランをひも解き、深く理解するところから始めていきます。そして、そこに脈々と流れる歴史とアイデンティティを見出し、次世代に発展的に引き継

くことを目標としています。

そこで本日は話題を三つに分け、はじめに南山大学名古屋キャンパスの建築的な特徴および建築的に見た歴史、二つ目に第Ⅱ期のQ棟、リアン新築工事。三つ目にⅢ・Ⅳ期の改修工事についてお話させていただきたいと思っています。

二 南山大学名古屋キャンパスの建築的な特徴

ご存じの方が多いと思いますが、南山大学は日本モダニズム建築の父と呼ばれるアントニン・レーモンド氏によってデザインされた非常に珍しいキャンパスです。彼は「自然を基本として」を建築理念として強く打ち立て、現在でもそのコンセプトは継続されていると思います。一九六四年の創立当時の南山大学の写真を見ると、地形を利用した独特な校舎の配置が見られます。現在の航空写真（写真1）と比べて見ると、現在もその骨格を維持しながら、さらに建築群が並び、緑も豊かに成長してレーモンド氏の目指したキャンパスが実現されているのではないかと思います。

まず南山大学のキャンパスの特徴についてお話します。最も大きい特徴はマスタープランにあると考えています。名古屋大学を例にすると、通常のキャンパスを考えるとときにキャンパスの骨格としてモールと呼ばれる



写真1 2018年南山大学キャンパス航空写真



写真2 南山大学キャンパスの特徴 メインストリートに東西にまたがる建物配置とヒューマンスケールの広場の連続と棟間の豊かな緑

緑の存在です。先ほどの広場のような空間から緑を直接見ることもできますし、教室内から緑を通した景色を見ることもできます。このことで名古屋市の都心部にある大学の中では緑豊かに感じる人が多いのではないかと思います。これらの効果がマスタープランの段階でセットされていたということが、とても大きな特徴だと思っています。

建物の配置については、形式に捉われず地形に合わせることで、自然環境に適した建築計画をシンブルに実現できると言えます。方位に合わせて南側に教室を置き、北側に廊下を置くことがマスタープランに合わせるだけで自然とできていくところが特徴です。そこにレーモンド氏は建物の面する方位に合わせて日射を抑制する庇やルーバ

るような大通りに平行に校舎を建ち並べます。南山大学の場合は、このメインストリートに対して垂直に重なるように校舎を配置します。(写真2)これがどのようなキャンパスの空間の違いをつくるかという点、通常は大通りに沿って比較的規模の大きい交流空間を提供します。一方、南山大学ではメインストリートを歩いて行くたびに校舎に囲まれた小さな広場のような空間が連続するという特徴があります。

このようなヒューマンスケールの広場が連続すると、人と人との距離が近く、学生の交流の機会と種類が増え、より親密な交流空間をつくることができると考えられます。おそらく皆さんの中でもメインストリートを歩いていると他の大学内を歩いているよりも、人とすれ違ったりする機会が多いのではないかと思います。

さらにこの校舎配置をもう一つ特徴付けるのが、校舎の間に育つ



写真3 レーモンド建築と豊かな緑が作り出す南山大学キャンパスの美しい景観

ーを設けて、自然環境に対応している建築をつくっています。ルーバーは方位によって付け方が変わっており、太陽高度の高い南側の窓は水平ルーバー、太陽光の低い西側、北側の窓は垂直ルーバーが配置され、日射の制御が行われています。それがよく分かるのはG30です。南側には水平ルーバー、北側には垂直ルーバーを設けて、一つの建物でも自然光の特徴に合わせてルーバーが備え付けられています。

またレーモンド氏は建築材料にもこだわっており、コンクリートの素材そのものを見せる打ち放しコンクリート。それも現在ではかなり高価な型枠である杉板型枠を使って、コンクリートに木の模様が打ち込まれています。加えて、有名な話ですけれども、「校舎外装のメインカラーは、この赤土と同じ色に」と言われ、この土地に根付いた独特のカラーデザインをしています。こちらもよく見ると施工が今でも難しいカラークリア塗装をしています。これは地肌のコンクリートの質感を損わないような工夫と考えられます。これらがそれぞれ調和してコンクリートと赤土の壁が並び、ルーバーや庇が作り出す水平・垂直のリズムがとても美しいキャンパスの景観をつくっています。(写真3)

三 南山大学名古屋キャンパスの成り立ち

ここからは、このような特徴を持つキャンパスの成り立ちを簡単に追っていきたいと思います。恐らく皆さんの中には長年この大学におられて、私より詳しい方がいらつしゃると思いますが、私たちは施設課さんからお借りしていた三冊の本と大学が作られたホームページを参考にまとめさせていただきました。

まず建築的に見るとキャンパスの成り立ちは六つのフェーズに分けられると考えます。第一フェーズは創世記、南山大学名古屋キャンパスが誕生するまでです。レーモンドのマスタープランを実現する名古屋キャンパスの核となる施設の建設です。現在でも現役で使われている、とても素晴らしい建築だと思います。ちなみに、この正門守衛所も一九六九年に建設されています。第二フェーズはグリーンエリアが整備されて名古屋キャンパスの骨格が完成するまで。ご存じの方も多いいと思います。レーモンド氏自身が設計したのは、このK・M棟までです。

第三フェーズとして考えているのが一九七〇年以降、八〇年代、九〇年代と、二〇世紀に南山大学のさまざまな研究センターが増えていき、本格的に国際的な大学となる発展的な時期です。このころから、L棟、J棟、またD棟の高層建築がつくられていきます。これらはキャンパスのマスタープランの核であるG棟などの低層の建築を守るために、あえてグラウンド側に高層建築を工夫しながらつくった時代ではないかと推測しています。第四フェーズはキャンパスの拡張期として考えています。瀬戸キャンパスをはじめとして名古屋では八雲エリアにキャンパスが拡大しA棟、B棟まで教育環境が広がっていきます。

そして第五フェーズでは、その広がったキャンパスをまた一つのキャンパスに統合するというフェーズです。One Campus Many Skillsというキーワードの下に、短大の統合化を含むR棟はじめ、S棟や私どもの関わったQ

棟の建設など、南山大学の成熟期として考えています。そして第六フェーズは、レーモンド・リノベーション・プロジェクトとなる既存建物の総合的な改修です。名古屋キャンパスに集まった学生たちに向けて既存棟改修も含めて、さらに充実した教育環境を提供する、まさにキャンパスとしての円熟期にあたるのではないかと思っています。このレーモンド・リノベーション・プロジェクトというのは、実は第五フェーズの終わりから計画されていました。ここからは、その原点になる第一、二フェーズをもう少しだけ詳しく追っていききたいと思います。

第一フェーズ

初代学長のパツヘさんが構想した最初の南山大学のキャンパスを現在の地図に置き換えてみると、現在のキャンパスがあるところの南側に面した斜面もイメージされていたと思われます。実際には丘の北側も含んだ現在の敷地になるのですが、そちらに先ほどのレーモンド氏のマスタープランが描かれています。敷地を南北に貫く尾根を敷地の背骨のようにメインストリートとし、先ほどお話しした建物を覆いかぶせるようなマスタープランが描かれています。

これはキャンパス建設中の貴重な写真です。当時の工事現場としても、かなり大規模なものであったことがよく分かります。この写真はキャンパスの骨格ができた時期です。まだ八雲エリアに校舎がありませんが、すぐに神言神学院の建設が始まっています。この写真はマスタープランの特徴がよく分かります。正門付近の広がりから、丘を登っていくメインストリートに覆いかぶさるように校舎が並んでいます。

この写真は竣工当時、東側から見た校舎群です。この当時から第一研究棟というのは周辺に比べてかなり背の高いものになっており、周りから見てもシンボリックな建築であったと思います。これはグラウンドからの写真です。

こちら側から見ても、やはり第一研究棟が高くみえし棟や丁棟などは、この第一研究棟の佇まいを参考にしたのではないかと想像しています。

この写真は今と変わらない正門の様子です。質実剛健で機能的な門構えが当時からつくられていたと思います。これは建設当時の第一研究棟の前の写真です。現在の図書館の前園の位置は、当時は駐車場として利用されていた。

この写真はH棟を見る中央アーケードです。当時はまだ樹木も小さく、かなり見通しの良いキャンパスだったことが分かります。この写真はH棟からG30を望んでいます。この広場のような空間は現在もほとんど変わらない風景になっています。このような風景が現在も残っていることが非常に素晴らしいことだと思います。

こちらも現在とほとんど変わらないコリドールの写真です。メインストリートに沿って開放的な廊下が配置されています。これはG30の内観写真です。この棟も現在まで、あまり大きな改修がないまま使われています。レーモンド氏の設計のレベルの高さがよく分かる建築だと思います。

屋上からの写真も、このかまぼこ型の屋根が現在まで変わることなく残されています。この写真の教室の窓から見る風景も、緑と隣の棟が重なるように見えて、今と変わらない特徴がわかります。

ここからの写真では、現在では見られないものシリーズの一部を紹介します。知っている方もいられると思いますが、かつて本部棟の増築前には、本部棟とメインストリートはブリッジによってつながれていました。今はここに増築棟があるので、階段を利用して入るとい状況です。これは増築前の図書館のエントランスです。現在の増築部は、この図書館のメインストリート側につくられるのですが、当時は広場からブリッジで建物をつなげていました。このようなつなげ方は、地形を保ったまま建物間を連携させるものとして、とても有効な手法であったと思

います。この写真は、現在は残っていない学生会館です。これは建築の形態としても独特な構成で、建て替えられるまで多くの人々に親しまれた建築ではないかと思えます。

これは第一フェーズ後半の計画時のスケッチです。体育館、クラブハウス、プールが計画されています。これらの建設によって大学に必要な機能がそろい、第一フェーズが完成し、南山大学名古屋キャンパスの歴史が始まっています。

第二フェーズ

次に第二フェーズです。これはレーモンド氏が描いたと推測されるグリーンエリアのスケッチです。(写真4) 現在と少し異なる部分がありますが、このエリアに新たな大学の中心をつくるという構想が見てとれます。個人的には、このグリーンエリアの構想はレーモンド氏のマスタープラン構想力の偉大さがよくわかるものと思っています。ここから八雲エリアへのキャンパスの拡張など、キャンパスの未来への方向性を決めた重大なアイデアなのではないかと思っています。

K棟は第一フェーズに倣い、土地の傾斜に対して垂直に配置されています。その東側にM棟という大教室群を機能的に連結しながら、パッヘスクエア側の壁面に屋外レリーフを設け、広場の中心性を生み出しました。その後、レーモンド設計事務所の方々へ引き継がれたN棟、第二研究室棟の建設によりパッヘスクエアの囲まれ感が増し、広場としての骨格が完成します。ここにグリーンエリアという学生の広場が整備され、現在の名古屋キャンパスの骨格が完成されました。このころになると緑も大きく育っており、現在の南山大学の面影が一層濃くなってきたと

たちが培ってきたキャンパスの文化を現在の学生たちの活動に引き継ぎ、より豊かに発展してもらえそうな空間づくりを目指していきたい。ということ。「理念」、「コンセプト」、「思い」としてまとめました。

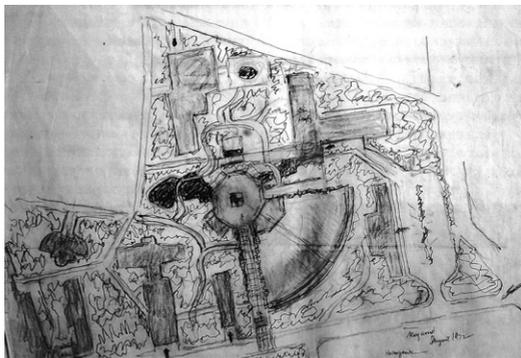


写真4 レーモンドによるパッセスクエアのスケッチ
南山学園のレーモンド建築（下）より

思います。

南山大学の特徴やキャンパスの歴史を振り返ってみると、改めてレーモンド氏のマスタープランが、現在までその骨格を変えずに残っていることが分かるかと思います。そこで私たちはレーモンド・リノベーション・プロジェクトの「理念」として、レーモンド氏の意思をつなぎたいと考えて、同じく「自然を基本として」を継承していこうという位置付けました。

そして、その方向性を示す「コンセプト」としては南山大学の歴史に脈々と受け継がれてきた特徴を維持しながら、現代技術で表現できる「自然を基本とした建築」を目指していこうと考えています。

また今回の改修への「思い」としては、元の姿を呼び起こしながら空間特性をより活かすことができる改修を行い、今まで南山大学の卒業生

四 第Ⅱ期工事

レーモンド・リノバージョン・プロジェクトは第五フェーズの終わり頃から始まりました。そのため、まず第五フェーズにあたる第Ⅱ期工事のQ棟、リアンについてお話させていただきます。「自然を基本として」という理念を基に、R棟やS棟のように現代の教育環境をどのようにするか。そしてOne Campus Many Skillsに合わせてどのように学生の居場所をつくるかが私たちの大きな課題でした。

Q棟

はじめに教室棟Q棟についてお話します。Q棟は既存のG・F棟との連携を密にするために、それらと同じ向きで隣に並ぶように教室群をふたつ配置しました。その間に中庭を設けてメインストリートから緑が入り込む構成と

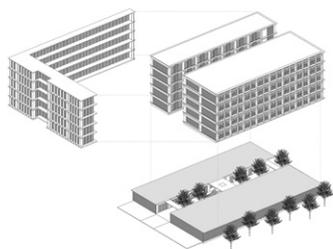


写真5 Q棟の構成イメージ図

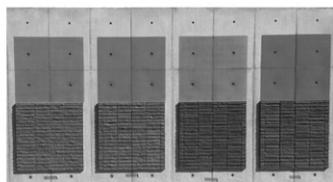
しています。メインストリート側には、G棟の廊下のような学生の交流の場所であるラウンジやエレベーターホール、廊下等を張り付けました。そこに方位に合わせた庇やルーバーを取り付けていきます。構成としては図のようなイメージになります。(写真5)レーモンド氏の教室群に立体的な廊下のようなイメージになりなイメージです。このようにしてレーモンド氏の建築の構成・デザイン(※以降、レーモンド建築)を活用しながら、新しい校舎をつくっていかうと考えました。そして、私たちは既存のレーモンド建築の調査・研究を行いました。調査の基本は実測です。既存棟のルーバーの寸法を測るところから始めました。その結果、メ



土の色の調査

外壁の色の調査

外壁の色の調査



モックアップ
による確認

写真6

カーとの検証を通して第一研究棟のルーバー寸法をQ棟の基本寸法にしました。G棟などのルーバーを再現することも考えましたが、現在のメーカーの品質管理上、実現不可能なほど薄く繊細であることがわかりました。その上で実寸大のモックアップを製作し、細部の設計を詰めていきました。

次に赤土色のコンクリート壁です。写真の左上はQ棟を建てる際の土の色をサンプルに検討したものです。加えて当時の施設課にいらっしやった伊藤さんから「体育館の内側の壁の色が劣化も少なく、最もオリジナルに近いのではないか」というアドバイスをいただき、私たちはその色からサンプリングを行い、目標とする色味を決定しました。

次に再度実寸大のモックアップによる検証を行います。ここではレーモンド氏が使用していたカラークリア塗装を使って、今回工事で実際に使用するコンクリートの上に、どの程度色を重ねれば先ほどの目標色を再現できるか等の検討を行い、現在の赤土色のコンクリート壁を実現しました。(写真6)

このようにして既存のレーモンド建築のデザインコードを現在の技術で再現したQ棟の外観をつくり上げました。これは南側と東側の外観写真です。(写真7) 外から見ても中から見ても、南山大学ならではの水平・垂直の交差するルーバーデザインを再現しています。この赤土色の再現は、本当に何度もサンプルをつくり、とても苦労しました。今から当時のサンプルの一部を回しますので、もし良ければご覧になってください。まず見



①美しい陰影のリズム ②室内から見るルーバー ③Q棟 南東からの外観 ④垂直水平のルーバーと赤土色のコンクリート壁

写真7

ていただきたいのは、これらのケース三本の土のサンプルです。実は赤土といっても一色ではなく場所によっていろいろな赤土があって、結局どの色が本当のレーモンド氏が目指した赤なのかと検証に苦労した部分です。それと、もう一つ見ていただきたいのが、カラークリアで塗装したものとカラーマットで塗装したものです。カラークリア塗装では後ろの地肌が透けて見え、色が薄くなってしまったり地肌の色を拾い過ぎてしまったり、いくつもサンプルをつくり検討を重ねたものです。次に西側と北側の外観写真です。(写真8)

こちらには垂直ルーバーを設置してレーモンド建築の特徴である繰り返しのリズムを継承して外観を調整しています。

Q棟はバツへさんの構想にあつた南向きの丘から北側に下り始めた位置にあります。そこで私たちはキャンパス内での向きに応じた佇まいを考えました。南向きでは今までのキャンパスの景観になじむファサードをつくり、北向きでは丘の上から名古屋市の中心部を望めるような開放的なファサードをつくってデザインをまとめました。

内部からの眺めも工夫しました。南側に面したラウンジからは南山大学の歴代の建物や豊かな緑を望むこと



写真8 学生の活動の垣間見える開放的なガラスと垂直ルーバーによるファサード



写真10 丘の地形を活かした名古屋市街が見渡せる北側の廊下



写真9 南山大学全域が望める南側のラウンジ

「自然を基本とした建築」を実現するために中庭形式の校舎としました。中庭を緑が育つように外部空間とすることで、全ての教室に自然採光、自然通風を確保する自然環境を取り込みやすい建築としました。これらは一階の教室と中庭の緑をそれぞれ見ている写真です。教室と緑を近付け、南山大学らしい教室をつくりました。この写真は一階ロッカー

ができ、キャンパスの歴史や文化を感じられるような空間をつくりました。(写真9) 北側の廊下からは名古屋市の中心部を望むことができ、学生さんたちがこれからの社会や自分の将来像を想像できる空間をつくりました。(写真10) 特にQ棟に移転してくるのが総合政策学部ということで都市を俯瞰して見られるような機会を増やしたらどうかという提案をさせていただきました。さらに既存棟で採用されている杉板型枠の再現も取り組みました。既存棟の庇が特に美しく、Q棟でも庇部分で取り組みました。この大庇はメインストリートから連続する庇の受けとしてつくり、Q棟の中庭に学生たちを引き込む構えをつくっています。

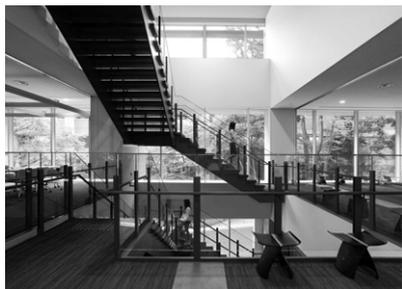
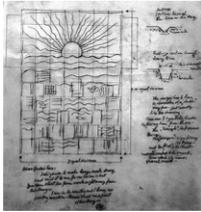


写真11 2Fラーニング・commons吹抜け階段 キャンパスの豊かな緑に囲まれた学習空間



レーモンドデザインの
パフフェスクエアのレリーフ

写真13



2Fエントランスのレリーフの美しい陰影



レリーフ調査



写真12 2Fメインエントランスホール
レーモンドのデザインによるパフフェスクエアのレリーフがアクセントとなる吹抜け空間

室と二階ラーニング・コモンズ、三階小教室を結ぶ階段です。こちらも樹木の大きさを感じながら移動できる空間としました。(写真11)

私たちはインテリアデザインにも「自然を基本とした」デザインとレーモンド氏のアートを意欲的に取り込みました。キャンパスの土と連続して感じるようにアースカラーを基調としたカラーリングとし、キャンパスの木立の陰影と呼応するリズム感のあるデザインとしました。そこにアクセントカラーとして二〇〇〇年に導入された南山大学のスクールカラーを使用し、伝統と未来の融合をねらいました。家具のデザインはレーモンド氏が描いた壁画をモチーフにデザインし、Q棟にしながらもG棟の corrido の雰囲気と結び付きやすくなることを狙いました。

この写真は一階、三階、四階のラウンジです。スクールカラーの意味と機能を結び合わせて、ここは学生たちが自由闊達に活動できる空間として南山イエローでまとめています。五、六階の研究室前のラウンジは静かな学習の場として南山ブルー、ライトブルーを使っています。また研究室周りのラウンジは落ち着いた交流空間として赤土色の空間をイメージしてつくりました。

レーモンド氏のアートを最も活用したのが二階のエントランスホールになります。エントランスに入るとM棟の外壁に描かれているレーモンド氏の

めるような配慮としても考えました。(写真12／13)

Q棟のコリドーと位置付けた西側、北側の廊下の壁の色は、レーモンド建築の赤土の壁の色を使いました。これは建物内においても南山大学のデザインコードを感じられる仕掛けです。それと同時に、建物の外側から見るとレーモンド建築を美術品の様にガラスで覆い、キャンパスの歴史を大切に守っているような建築をイメージしてデザインしました。(写真14)

このようにQ棟は、レーモンド氏の理念とデザインを継承することで、学生が今までのキャンパスの素晴らしさを感じながら、これからの将来の目標を創造できるような教育空間としてつくらせていただきました。(写真15)



写真14 レーモンド建築をガラスで包み込むようなファサードデザイン

レリーフをモチーフにしたアートが迎えます。これはキャンパスの北に位置するQ棟もキャンパスの中心となるグリーンエリアと脈々とつながっていることを伝えたいと思いつきました。ここでも実測などで既存のレリーフを調査し、自然の光が時間とともに影を落とすのが変わっていく様子を再現しています。特にQ棟には瀬戸キャンパスから来る学生が多かったため、少しでも早く名古屋キャンパスに馴染



写真15 新教室棟 Q棟をメインストリートから望む



写真17 「森の広場」豊かな森に面した開放的なファサード

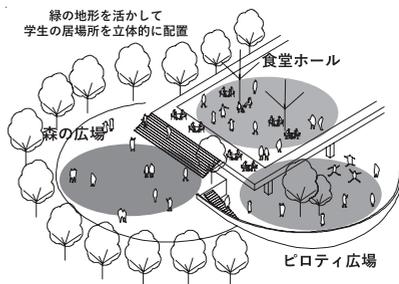


写真16 食堂棟リアンの学生の居場所配置のイメージ図

リアン

次に食堂棟リアンです。私たちはキャンパスの豊かな緑を十分に活かした施設にしたいと考え、正門西側の森の中腹に配置しました。そして、ワンキャンパスに向けてさまざまな人々が緑の中で交流できるようにクラブハウス前の「ピロティ広場」、緑に囲まれた「森の広場」、「食堂ホール」と学生の居場所を、地形の高低差を利用して立体的に配置しました。(写真16) この居場所を多方向から立体的なアプローチでつなぎ、たくさんの方々と共に教職員の方々にも使用していただきたいと考えました。

「ピロティ広場」は、クラブ活動を中心に使う場所としながら、学生が自由に集まれる場所となるようにR棟やテニスコートとつながブリッチから、よく見えるよう



写真19 現存しない学生会館の2階 学生ホール 南山学園のレーモンド建築(下)より



写真18 「食堂ホール」特徴的な天井デザインと外部を取り込む開放的なファサード

な広場としました。「森の広場」(写真17)は、食堂とクラブ室をつなぐだけではなく、テラス階段を設けて多目的に利用できるようにつくりました。「食堂ホール」(写真18)は、森への大きな開口部とユニークな天井を設けました。これは解体された学生会館の二階学生ホールの特徴的な天井と外部への大開口部を再現したいと思いデザインしました。(写真19)そして、特徴的な内部空間と外部の豊かな緑が一体的に感じる空間をつくりました。

食堂ホールの天井のトップライトは、奥行きの高い食堂棟に明かりをもたらすだけではありません。上部に開口窓を設けることで、春や夏にはここを開けると空気が流れ、冬には屋根の小屋裏で暖められた空気を空調設備で利用する環境装置としても考えています。これも「自然を基本とした建築」を現代の技術で体現する試みです。

照明計画も自然と調和するデザインを目指しました。木漏れ日をイメージした折り上げ天井を設け、時間と共に変化する自然光を感じて過ごせる食堂ホールとしました。例としてある一日の夕方からの雰囲気を紹介したいと思います。暗くなっていく周囲に対して、時間帯によってダウンライトにより落ち着いた空間をつくったり、間接照明によって明るい交流空間をつくったり、さまざまな空間を演出できる照明デザインとしています。このように自然光の移り変わりに合わせて時間とともに学生のさまざまな活動を支えることができる食堂としてつくらせていただきました。

このようにして第Ⅱ期工事は、レーモンド氏が描いたマスタープランを維持しながら、その建築設計で用いられた手法を研究・活用しながら、One Campus Many Skillsに求められる学生たちの交流の場を設けた現代の「自然を基本とした建築」をつくれたのではないかと思っております。

ここからいよいよレーモンド・リノベーション・プロジェクトとして、レーモンド建築と直接向き合う設計に入ります。

レーモンド・リノベーション・プロジェクトというのは、全てを元の状態に戻すわけではありません。残すべき

南山大学の建造物は文化財に指定されていないが、文化庁作成の重要文化財（建造物）の「保護の方針」の定義とカテゴリーを利用した。

ア 【保存部分】
文化財としての価値を守るために厳密な保存が要求される部分

- 基準1：材料自体の保存を行う部位
→フレスコ画、レリーフ
- 基準2：材料の形状・材質・仕上げ・色彩の保存を行う部位
→外装（コンクリート壁、ルーバー等）

イ 【保全部分】
維持及び保全することが要求される部分

- 基準3：主たる形状及び色彩を保存する部位
→外装サッシ、内装（梁）
- 基準4：意匠上の配慮を必要とする部位
→内装（壁、天井）

ウ 【その他部分】
活用又は安全性の向上のために改変が許される部分

- 基準5：所有者等の自由裁量に委ねられる部位
→トイレ、什器、設備

写真20 第三・IV期改修工事の改修ガイドライン

ところは残し、更新すべきところはするというガイドラインを作りました。私たちは、文科省文化庁作成の重要文化財（建造物）の「保護の方針」を利用していただきました。なぜなら南山大学の建築群は文化財にこそ指定されていませんが、日本建築学会を母体としたドコモジャパンの百選に選ばれている重要な建築文化財として保護することがふさわしい重要な建築群と考えたためです。この方針では保存が要求される「保存部分」、配慮しながら維持する「保全部分」、使用勝手によって改変する「その他の部分」という三つのカテゴリーに大きく分けられています。（写真20）

具体的な「保存部分」として、レーモンド氏によ

る壁画やレリーフというアート。それとレーモンド建築を特徴づけるルーバーを位置付けました。

「そして主たる形状および色彩を保存する「保全部分」として、アルミサッシ窓の改修を位置づけました。コンクリート躯体の開口部をそのまま残しながら、窓サッシの割り付けを空間の特性に合わせて変えていく方針としました。同じく室内の「保全部分」として、壁や天井を位置づけました。教室内の柱や梁をそのまま残しながら、内装デザインが調和するように配慮して改修する方針としました。

一方、変更が許容される「その他の部分」として、什器や設備は現在の教育環境にとって必要な機能を整備する方針としました。バリアフリー用のエレベーターやトイレも使い勝手を優先した改修を行います。

この方針を基に建物ごとをカテゴリ分けして改修グレードを設定しました。これらの方針をガイドラインとしながら、具体的にどのような改修を試みていくかが課題となります。本日はこのうち最も改修グレードの高いG30・G・H・F棟とコリドーについて、順にお話しさせていただきます。

G 30

G 30の改修内容は、「外装改修」、「内装改修」、「アメニティ改修」の三つのジャンルになります。それぞれのジャンルに対して「デザイン」上の項目として美観の修正、内装材の交換、什器の再レイアウト、バリアフリー化。「構造」上の項目として耐震補強・天井の耐震化。それと「環境・設備」上の項目として断熱性、水密性の向上、設備の集約と隠ぺい化、AV設備の整備やトイレの改修工事を行いました。特に「構造」の耐震補強についてお話しすると、G 30は耐震改修促進法上、耐震診断の義務のない建物規模でした。しかし、より安全な教育環境を整備したいという大林組さんの構造担当の方の提案で耐震補強を行うことにしました。さまざまな検討を行い、G 30の空間



写真22 【改修後】メインストリート



写真21 【改修前】メインストリート

の骨格、外装を極力守る方針で耐震補強を計画しました。ここからは外装改修について実際の改修をみていきます。これは改修前のメインストリートから見た外観写真です。赤土色の外壁やコンクリート、舗装材の劣化などが見られます。これは改修後の写真です。美観改修のためのコンクリートの塗りなおしに加えて、窓のところに壁を追加しています。このような目立たない箇所に耐震壁を追加して、見た目を維持しながら耐震補強を行いました。アメニティ改修としてメインストリートに舗装のバリアフリー化やサインの追加を行っていきました。(写真21/22) 同じくG30の南側の外装前後の写真です。南側も壁の色やコンクリートの劣化が見られます。また建設後に増設された設備の配管なども露出しています。ここでも美観整備に加えて、目立たない位置に耐震壁や構造スリットを追加して、外装デザインの見え目が変わらぬ耐震補強を行いました。設備配管を埋設し、



写真24 【改修後】G30南側外観



写真23 【改修前】G30南側外観

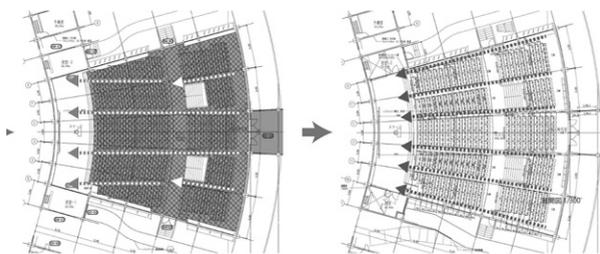


写真25 G30の通路方向をホワイトボードに集中させる改修計画

出していたAV設備なども再配置しました。

また什器レイアウトの再配置も行いました。既存の固定席のレイアウトをみると、黒板に向かって少し通路が開いていくような構成になっていました。これをステージ向かってに集中するように通路を再レイアウトし、授業への集中力を高めるような修正を行いました。(写真25)

外構の修景も行いました。さらに今まで車いすなどでは、アクセスの難しかった階段教室へのバリアフリー動線を新設しました。(写真23/24)

次に内装改修をみていきます。教室内では設備の改修、窓サッシの工事に合わせて吊天井の耐震化を行いました。もともとコンクリートの屋根から吊られていた天井を、屋根を支える大梁から鉄骨材で補強する手法を取りました。改修後の新しい天井デザインは、いくつもの案をつくり検討を行いました。最終的にはもともとの船底型を残すことがG30の今後の在り方にふさわしいものとして決定させていただきました。

ここで天井改修の内容・工程の一部を写真でお見せします。まず既存の吊天井を撤去し、断熱材を吹き付けました。その後、鉄骨の構造体を備えて、設備や下地などを設けました。ここに木材の天井仕上げを貼り付けて、原型に近い船底型の天井をつくり上げました。

空調設備の隠ぺいについては、設計時に改修後の温熱環境のシミュレーションを行い、改修後も現代の教室にふさわしい温熱環境が可能か確認しました。同時に露



写真27 【改修後】 G30内観-1



写真26 【改修前】 G30内観-1

ここからは改修前後の内部空間全体の写真を比べて見ていきます。改修後の耐震化した天井デザインです。照明改修としてもまぶしさを抑えるために、照明器具をダウンライトに変えています。通路の整備を行い、ステージ近くに車いす用のスペースも設けました。また窓サッシは大きな割付けに改修して、断熱性・水密性の向上に加えて、先ほどお話しした南側に水平ルーバー、北側に垂直ルーバーという構成が室内からも見てわかりやすいようにしました。(写真26／27) これは斜め後方から見た写真です。ここにも耐震壁が追加されています。内部空間の骨格を変えないような耐震補強を行っているのが見えていただけるかと思えます。教室の背面をみると、改修前には増設された空調設備の露出が目立ち、当初の映写室が未使用になっていました。改修後には空調設備を天井内に隠べいし、元

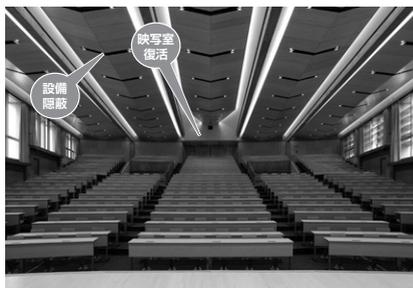


写真29 【改修後】 G30内観-2



写真28 【改修前】 G30内観-2



写真30 【改修前】 G棟階段教室内観



写真31 【改修後】 G棟階段教室内観

映写室にプロジェクターを移して当初の機能を復活させました。（写真28／29）映写室の復活はプロジェクターの映写距離が遠く、機器性能の精査や位置の調整などがかなり大変だったのですが、施工者も一緒に含め、みんなが「絶対にやり遂げよう」と意気込み、何度も調整を行い出来上がりました。

階段や通路にはタイルカーペットを敷き、音環境の向上を行いました。意匠的にも大教室にふさわしい階段の風格を備えるインテリアデザインとしました。特にこのエントランスホールから階段を上る際に、授業に対する高揚感が高まるようなアプローチをつくり出しています。また保存活用的一面から、当初の避難口EXITサインが廃棄するにはもったいないほど良いデザインでしたので、施設課さんに預けて保管してもらっています。

これはトイレの改修前後の写真です。換気不足への対応や内装材、衛生器具の交換をして衛生的で温かみのあるトイレに改修しました。また、もともとドアが付いていたトイレを、多くの人が使いやすいように通路形状を工夫してドアなしのトイレとして改修しています。

以上が簡単ですがG30の改修内容についてです。

G棟

次はG棟です。G棟はG30と一体に見ると大中小の親子のような室構成になっています。そのため、G棟もG30と同じ様な手法で改修を行いました。



写真33 【改修後】 G棟東側一般教室内観



写真32 【改修前】 G棟東側一般教室内観

この写真は建設当初のG棟の階段教室です。当初から現在までに様々な設備が増設されて、改修前にはすっきりとした内装から少し雑物が目立つようになりました。改修時には設備を天井やホワイトボード裏に隠ぺいして、建設当初のすっきりした教室に戻しました。照明はダウンライトに改修し授業中に光の眩しさが目に入って来ないような対処を行っています。(写真30/31)

次の写真はG棟の小教室です。こちらも同様の手法で天井を張り替えながら、目立っていた増設設備を隠ぺいしてすっきりした教室デザインに改修しました。加えて窓サッシも改修しました。G棟東側の教室からは、私がとても好きな風景が見えます。外を見ると緑に囲まれていて、都心部にいながら避暑地のようなとてもさわやかな風景が見えます。この南山大学の特徴的な風景をぜひ残したいと思いついて、窓サッシの割付けを当初より大きなサイズに改修しました。(写真32/33)

続いて中央廊下の改修前の写真です。建設当初の状況からタイルカーペットが貼られ、照明器具や手すりが増設されていました。私たちはこの中央廊下もG棟の記憶を残す重要な空間と位置づけ、骨格はそのままにインテリアを統一させてすっきりした空間に改修しました。なお、床のタイルカーペットは水性の接着剤を用いることで、タイルカーペットを剥がせば、建設当初の



写真34 【改修後】 G棟中廊下 十字の影

ラコッククリートのパタンデザインが見えるように配慮しました。G棟で有名な十字の影も、改修後にも再現されています。(写真34)

もう一つキャンパスのバリアフリー化として大切な改修をしました。G棟を八雲エリアとメインストリートを結ぶ主要なバリアフリー動線として位置づけエレベーターを新設しました。場所は一階中央廊下の小教室前のラウンジです。こことロゴスセンターに通じる地下二階を結ぶバリアフリーエレベーターを設けました。エレベーターホールは、学生が集まるラウンジでもあるため、ノエミさんデザインの家具を置いて再整備しました。エレベーターは建設当初から新しく備えたものであると分かりやすいように、黒く透けるガラスをイメージしてデザインしました。地下二階のエントランスも同じく学生たちのラウンジとしてデザインしています。エレベーター内の機器も見えるので、興味がある方はエレベーターの中身をのぞいていただければと思います。

先ほどの写真で気付いた方がいらつしやるかもしれませんが、中央廊下の窓は建設当初のものをそのまま保存してあります。なぜかという点、一九六四年前後は建築材料業界では特殊な時期であり、この時期に作られたアルミサッシとガラスというのは、もう現在では生産できない貴重なものなのです。これを工業文化財と位置付けて建物内部にそのまま保存しました。元々この窓は遮音性を考慮し二重サッシになっています。そこで教室側のサッシのみ交換して廊下側は保存するという工夫を行いました。教室内からみると外側のキャンパスの緑と、廊下側には建設当初のデザインが見られる改修ならではの楽しめる空間デザインとなっています。

他にも素材をそのまま保存している場所が地下一階です。「あまり変わっていないのでは」と思われるかもしれませんが、これは建設当初の板壁などをそのまま保存する場所として位置付けました。

F棟・H棟

次にF棟・H棟の小教室が集まる棟の改修です。こちらにも内装改修についてお話します。この小教室群も教育環境の向上を目指しました。ホワイトボードやAV設備、什器の交換だけではなく、冬や夏でも窓を開けなくて済むように換気設備の新設や断熱性能向上のための窓サッシの改修を行っています。この窓際に換気設備を設けて、環境性能が向上させて学生の過ごしやすい居住空間をつくりました。また照明器具の向きを変え、授業中にホワイトボードを見ても眩しさを感じにくい向きにしました。廊下側の空調機は、すでに近年更新されており撤去するにはもったいないので残したままとし、適切な更新時期になったところで、同じく天井内に隠ぺいできるように計画しています。窓サッシの改修では緑とルーバーがきれいに見えるように割付サイズを調整しました。窓サッシの上枠の位置はルーバーの位置に合わせてすっきり見える窓デザインとしました。

廊下の改修はレーモンド建築の骨格を顕在化させることを重視しました。F棟とH棟は柱と梁という大きなコンクリートのフレームの連続で構成されています。そのためフレーム周りは白い壁とし、フレームの間にある廊下の間仕切壁は建設当初の木壁を強調するようなインテリアにしました。既存のインテリアが経年変化で退色して、少しぼやけているような状態から、構造物と木壁の美しいインテリアデザインの廊下に改修しました。

H棟一階のラウンジは建設当初の記憶を残そうと工夫した場所です。「掲示板の位置が少し高いのでは」と思う方がいるかもしれませんが、ここはH棟の女子トイレが増設されるまで窓だった箇所になります。もともと窓だったという記憶を残すために、掲示板そのものの位置を変えずに改修しました。

外装改修では建築の改修以外にも少し工夫した点があります。写真はF棟のセミナー教室の外観です。皆さんから見てどこにブラインドが入っているか分かるでしょうか。答えは、この下の窓の左側と右側にあります。ここで



写真35 【改修前】 G棟コリドー内観

はブラインドの色を工夫しており、左側が白いブラインド、右側にはグレーのブラインドです。右側のグレーのブラインドは、あるかないかほとんど分からない様に見えませんか。私たちはメインストリートに面する景観の保護を重要視しており、ブラインドを降ろしても目立たないグレーのブラインドを特注色でつくって整備させて頂きました。ちなみに先ほど白く見えたブラインドは本来、室内側に面するもので、もし裏返っているのを見かけたら、戻していただけると景観上とてもありがたいです。

もう一つ目立たないのですが、手すりの色についても調査・議論を深めました。元施設課の伊藤さんにもご協力いただきましたが、過去の写真は白黒が多く、手すりについての文献も見つからず、当初の手すりの色の断定が難しいものでした。そこで私たちは二〇一二年に神言神学院を改修された名古屋大学の建築にいた谷口元さんにヒア

リングしました。「当時改修した際は塗り重ねられた塗装の層の分析と卒業生の証言から色を再現して、このブルーをつくった。」ということをお聞きしました。旧教室棟は、神学院とほぼ同時期・同エリアに関連したデザインでレーモンド氏が設計したものであるため、私たちは大学も同様のデザインをしたものと位置づけ、南山ブルーをイメージさせる濃いブルーを採用しました。



写真36 【改修後】 G棟コリドー内観

メインストリート・コリドー

次は本日最後にお話しする改修エリアであるメインストリートとコリドーです。これは一九六四年の竣工当初のコリドーの写真です。私たちはメインストリートとそれに沿って配置され、教室間をつなぐコリドーが、学生たちが自然と交流できるとも重要な役割を担ってきたのではないかと考えました。これは当時レーモンド氏が描いた図面です。この図面から現在の使われ方を分析させていただきました。そうすると、コリドー、メインストリート、そしてG 30ロビーまで一体的にみえる交流の場が、内外を分ける小割の窓サッシによって、それぞれが分かれてしまっているのではないかと思われました。そのため窓サッシを当初より大きな割付けに改修し、コリドーからメインストリート、G 30ロビーまで視線がつながる大きな交流空間にする方が学生たちの交流がより活発になるのではないかと考えました。

この写真は改修前のコリドーです。(写真35/36)このメインストリート側の窓サッシを大きくし、メインストリートと視線をつなぎます。こうするとコリドーにいながらキャンパス内でのさまざまな発見や出会いが生まれる空間になるのではないかと考えました。これは工事中の窓サッシのない状態の写真です。コリドーとメインストリートとの境目がなく、外部と教室前の空間が地続きになり、大きな交流空間の骨格ができています。当時は大きなガラスや窓サッシの製作は難しかったこともあり、レーモンド氏も本来はこの様な空間をつくりたかったのではないかと私は想像しています。この写真はG 30から見たメインストリートとコリドーです。ここにいるとさまざまな学生の活動が本当によく見える場所だと感じます。

またマスタープランから生み出される緑の顔出しも強調したいと考えました。この写真は当初の窓サッシの割付けです。こちらも改修時に窓サッシを大きく割り付けることで教室間の緑と小道の見通しを良くしました。この緑

門の緑まで見えるようになっていきます。この緑へ視線が抜けるアイデアは、Q棟の計画時から考えていたもので、今回の改修でやっと実現できましたので、ぜひ現地を見て頂けるとありがたいです。

そして、このコリドローの改修に合わせて、レーモンドの壁画にも注目しています。この写真を見るとコリドローの家具は学生たちの待ち合わせ場所というだけではなくて、壁画を鑑賞できるように置かれているのではないかと考えました。そこで私たちはコリドローとG30双方の壁画をより見やすくすることで、メインストリート歩きながらレーモンドの壁画が鑑賞できるような空間をつくりたいと

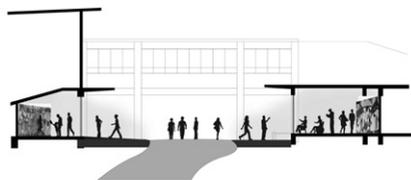


写真37 G棟コリドローと壁画の改修イメージ

をメインストリートからも感じられるようにすれば、キャンパスの緑の豊かさを学生たちがより享受できるのではないかと考えて改修しました。

また、コリドローの突き当たりの壁もデザインを工夫しました。H棟側の突き当たりはもともと白壁でしたが、寄付銘板の設置に合わせて、キャンパスの木立をイメージしたデザインにすることで、突き当たりにも緑の存在を想像できるようにと思つて提案させていただきました。また、これはコリドロー反対側のF棟側の突き当たり窓の写真です。Q棟の廊下を抜けて、その先の北



写真39 【改修後】 G棟階段教室の壁画

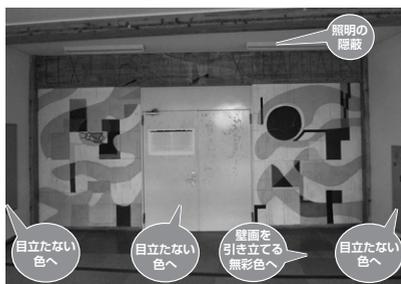


写真38 【改修前】 G棟階段教室の壁画

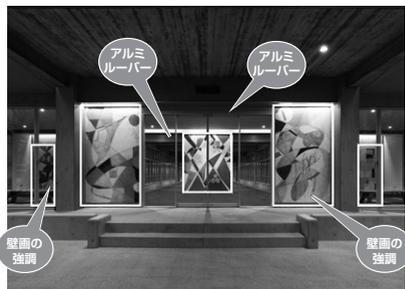


写真41 【改修後】 G棟エントランスと壁画

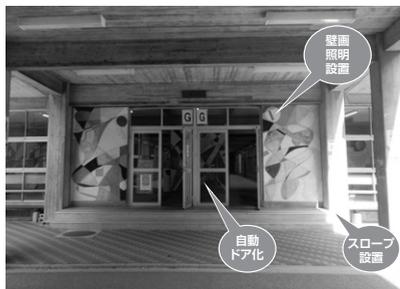


写真40 【改修前】 G棟エントランスと壁画

考えました。学生の交流空間として、自然の緑に加えてアートもある南山大学ならではの贅沢な空間を顕在化させたいという思いで計画しました。（写真37）改修方針通りに、壁画は「保存部分」として現状のままとします。顕在化の補助には壁画を間接照明で照らし、他の照明はできるだけ目立たないダウンライトとします。床材も壁画の色彩を目立たせるよう無彩色にします。（写真38／39）この設計段階のデザインシートの黄色タイルカーペットも最終的にはグレーに変更しました。家具の再配置については、ノエミさんがデザインされた椅子を元のよう配置しながら、改修後には壁画内に登場する形や色をモチーフにしたデザインの新しい家具を並べて配置します。

これが改修前後のコリドールの写真です。メインストリートとの見通しを良くし、家具は壁画とメインストリートの双方が見られるような配置としました。これは教室の出入口の改修前後の写真です。改修前には壁画以外の要素が目立っていたところを、色彩の調整や設備を目立たなくすることで、壁画がより強調される出入口の構えをつくりました。

この写真はG棟中央廊下の独立壁の壁画です。先ほどと同様の手法で壁画が際立つように整えます。この両脇通路の上部がアルミルーバーになっていることを、次の正面出入口の説明まで少し覚えておいてください。次はメインストリートからG棟の正面出入口の改修前の写真です。先ほどのエレベーターとつながるよう



写真43 【改修後】 G30エントランスと壁画



写真42 【改修前】 G30エントランス

同じように整えていきます。増設された設備を隠し、床や壁、扉を目立たなくし、間接照明によつて壁画が浮き立つようなデザインとすることで壁画を空間の軸として広がるロビーができます。

竣工時、鳥巢先生に気付いて頂きましたが、壁画にある十字架の上の魚が遠くから見ると隠れています。近付くと見えてくるという演出をしているので、皆さんも見えていただけると幸

にスロープと自動ドアを設けてバリアフリー化をしました。さらに壁画に間接照明を設けてメインエントランスとしての構えを強調します。これが改修後の写真になります。メインの出入口にふさわしい、しっかりした構えをつくりました。ここで先ほどの内部のアルミルーバーを思い出してください。入口の自動ドア上部と内部のアルミルーバーの意匠を合わせることで、メインエントランスの奥行き感をつくり、人々を招き入れやすい空間としました。個人的にここは本当に美しいエントランス空間だと思います。壁画が前後に配置されており、アートによって招き入れられる非常に貴重な空間だと思います。(写真40/41)

さらにその向かいにあるG30ロビーの空間も



写真44 【改修後】 G棟コリドーと壁画

い
です。

また改修前は小割の窓サッシによって、メインストリートから壁画が少し見にくかったので大きな割付けの窓サッシに改修し、間接照明を設置することで外を歩いていても、壁画が見やすくなるように工夫しました。(写真42/43) これはメインストリートを見た改修前後の写真です。このようにG30ロビーとコリドールの改修を通して、多くの学生たちが集まるこの場所をより広がりとお興行きを持った交流空間としてつくり、さらにもともと持っていた魅力を顕在化させることで学生たちの多様な活動を支える空間を整備できたのではないかと考えています。

このコリドールの照明計画も第Ⅱ期のリアンと同じように考えました。時間の変化に合わせて空間の雰囲気徐徐に変化していき、学生たちのさまざまな活動を誘発する場所になればありがたいと思っています。(写真44)

このように長い間使われながら少しずつ変化したメインストリートを元の姿をよみがえらせながら、空間の特性をより活かせるような改修を行うことで、今までたくさんの方々の学生さんたちが培ってきたキャンパス文化を今の学生さんたちに引き継ぎ、より豊かにしてもらえようという空間づくりを目指してきました。

現在、運動エリアの改修と、今後はグリーンエリア周りのリノベーションに入っていきます。引き続き工事があり、皆さんにはご不便をお掛けすると思いますが、ご協力いただければありがたいと思います。ご清聴ありがとうございます。